

浅野 英治さん



介護される側、する側双方の負担軽減を一。そんな思いから、入浴時などに要介護者の腰に巻き付けて使用するベルトが発売された。考案したのは平塚市の浅野英治さん(79)。自らも要介護者で、入

浴介助時に転倒の危険性を感じたことなどから開発に至った。「自分の困った体験を生かした。ぜひ多くの方に利用してもらいたい」と期待を込める。

(田中 祥子)

平塚の浅野さん(79)

要介護者自ら考案

支え手負担ベルトで軽減

浅野さんは50年ほど前、自らが考案した商品販売などを手掛ける「アイデアハウス」を都内で創業。写真用フィルム空きケースを再利用した鉛筆削りを開発するなど、ユニークなアイデア商品を世に送り出してきた。

ところが数年前に病気がかかり、手足が思うように動かさなくなると入院することになった。ベッドなどから起き上がる際、看護師ら介助者に脇の下に手を差し込んで上半身を抱きかかえてもらうことで立ち上がる方法をとっていた。ただ、この方法では、体重を介助者に預けることになり、介助者の腰に大きな負担が掛かる。「介助を受ける側も足腰を動かす努力をしなくなり、文字通り『おんぶに抱っこ状態』。ますます筋力低下につながるのでは」と疑問に感じるようになった。裸になるシャワー時は介助者も服などをつかめないため、転倒の危険を感じたこともあるという。

試しに革製のベルトを腰に

入浴時の不安、共通の悩み

巻いて、介助者が体をつかみやすくしてみたが、「革は水に弱く、抱きかかえられると肌に食い込んで痛くてとても使えなかった」。海外製品で似た用途のベルトがあると聞き、取り寄せたが、サイズが合わなかったり、肌触りが悪かったりと課題も多かった。そこで、アイデアの虫がうずく。「困っている人は自分以外にも大勢いるはず。何とか新しいベルトを考案できないか」。肌に当たる部分はかぶれにくく柔らかいタオルを



浅野さんが考案した介助ベルト

選定。穴が開いたホルダーにタオルを通す構造にして、汚れた場合はタオルを洗濯・交換して使用できるようにした。

ホルダーの素材も、耐熱性や耐久性などを考慮して、軽量のソフト樹脂を採用。着想から約2年、20個以上の試作品を作って完成にこぎ着けた。

要介護者が腰にベルトを巻いて前屈みの姿勢になり、足に重心を移したところを、介助者が相撲のまわしのようにベルトを持って立ち上がらせ

る。要介護者の脚力を利用して立ち上がるため、脇に手を差し入れる方法に比べて介助者の負担が少なく、介助者のスキルによる差も少ないという。

同じく高齢の妻やヘルパーに使用してもらったところ、「すごく楽になった」と評判は上々。現在、横浜市中区に本社を移したアイデアハウスの代表を務める長男の英人さん(51)も、「『老老介護』という言葉がある通り、介助者の人手不足など介護を取り巻く環境は厳しい。こうした器を多くの方に利用してもらったことで、介護サービスの質の向上につながれば」と話している。

「タオルベルト」と名付けた新商品は1個1万2千円(希望小売価格、税別)。介護保険が適用される。問い合わせは同社045(4)537718。



アイデアハウスの介助ベルト。入浴時の介護負担を軽減する